

J **apanese text**

2016年 秋/冬号 日本語編

インタビュー

アーティスト・インタビュー

小池一子

——現代美術館を持つ街の豊かさ

撮影＝鈴木一彦

文＝住吉智恵

p.066

青森県十和田市の中心地、官庁街通りを進むと、道の両側には白い積み木のような建物と、巨大なアリアやオバケ、花で飾られた跳ね馬、草間彌生のカボチャやキノコなどカラフルな屋外彫刻が立ち並び、子どもたちが潜って遊ぶ光景が見られる。駒街道と呼ばれ、かつて開拓民が丹誠込めて育てた軍馬が闊歩したという、この通り全体をひとつの展示空間に見立てた「Arts Towada」計画の最初の取り組みとして、2008年に開館した十和田市現代美術館。設立準備から関わってきたクリエイティブディレクター、小池一子さんが今春、5代目の新館長に就任した。

「当時、市長がプロジェクトを発足した決断には、東北の民俗史的な背景がありました。明治時代に新渡戸稲造の祖父が主導した近代都市計画を紐解いてみると、十和田が『いまこの時代に生まれてくるもの』に価値を見出し、大事にしようとする感覚が根付いた土地であったことがわかります。現代美術館がすく合っている街だと思っています」と小池氏は語る。

金沢 21 世紀美術館や豊島美術館で知られる建築家・西沢立衛の掲げた設計のコンセプトは「アートのための家」。ガラス張りの面から中が見える「祠」のような建物が、それ自体がひとつの展示室として敷地に点在し、広場や通りに向かって開かれている。1つのアートに1つの家をつくってあげる、という発想は、欧米で構築された美術館の形式を軽やかに逸脱し、新しいアートのあり方を提示した。

「アートの家」には、十和田のこの美術館でしか見ることが

できない、ワン&オンリーの恒久設置作品が展示されている。国際的・先鋭的なアートシーンで活躍する33組のアーティストによる、コミッションワークで構成されたコレクションは開館当初、街の人たちに衝撃を与えたという。

「もちろん、美術館設立の計画段階から賛同者ばかりではなかったと聞きます。それでも何度も足を運ぶうちに気に入った作品を見つける方も多く、今では他県から人が来ると自信満々で連れていくようになった、という話も聞きます。中でもロン・ミュエクの彫刻作品『スタンディング・ウーマン』は“大きなおばさん”とニックネームで呼ばれるほどの人気で、美術館のシンボルですね。私もタクシーの運転手さんに自慢されたことがあります」。

実は小池さん自身が、日本の現代美術とデザインの世界では“ビッグ・ママ”的な存在だ。1983年、東京下町の旧回米市場であった「食糧ビル」に、日本初の非営利のオルタナティブスペース「佐賀町エキジビット・スペース」を開き、キャリアもお金もないが才能のある若いアーティストたちを世に送りだした。一方で「MUJI（無印良品）」の立ち上げに参画するなど、現代人の等身大の生活と良質のデザインを結びつける活動を支えてきた。

十和田の美術館でも、その特別な「目」が、年2回企画展示室で行われる展覧会にフォーカスされることを期待する人は多い。メインで担当する最初の展覧会では、小池さんが長年志を共にし、2年前に事故で急逝したデザイナー、ヨーガン・レールのライフワークを取り上げる。

「石垣島の浜辺に打ち寄せるプラスチックゴミを収集して光のオブジェをつくることで、彼は地球環境破壊への抗議を発信し続けました。展覧会の心臓となるのは、雪景色の十和田に暖かい光をともし彼の美しい作品と、そこに込められた激しいメッセージです。できる限りきちんと伝えていきたいですね」。

漂着物を組み合わせてつくられた無数のランプのインスタレーションは、観るものを幻惑すると同時に、やるせない虚しさを余韻に残す。このほか、写真家クリス・ジョーダンが消化できないプラスチックやマイクロチップを飲み込んで死

んだ、海鳥の死骸をとらえたドキュメンタリー映像と写真も展示される予定だ。

「小粒でもピリッと気の利いた企画展をつくっていききたいですね。10年前の開館の頃、常設コレクションに選ばれた」とれとれ”のいきのいいアーティストたちが今、世界で活躍するエスタブリッシュな作家になりました。さらに新しい作家をこの十和田から出していきたい。ドイツから来た大きなおばさんに睨まれて育った子どもたちがアーティストになる時代が来たら、それは街に現代美術館を持つことの豊かさそのものではないでしょうか」。

何度訪れてもおもしろい、質の高い展示が愛されている十和田市現代美術館。今後はさらに小池さんの展望する「クリエイティブに人を育む美術館」へと醸成されていくことだろう。

On the Beach ヨーガンレール 海からのメッセージ

10月8日～2017年2月5日

十和田市現代美術館

青森県十和田市西二番町 10-9

Tel. 0176-20-1127

月曜休館（祝日の場合は翌日。12月26日～2017年1月1日は休業）

towadaartcenter.com

（写真）

佐賀町エキジビット・スペースのアーカイブ事務所がある3331アーツ千代田にて。

白い積み木のような美術館の姿を巧みに利用したライトアップ作品。

高橋 匡太《いろとりどりのかけら》©Mitsutaka Kitamura

ロン・ミュエク《スタンディング・ウーマン》

写真＝小山田邦哉 Courtesy Anthony d'Offay, London

蓮沼執太

——21世紀型「作曲家」の新たなアプローチ

文＝住吉智恵

p.068

蓮沼執太は今まさに「ひらかれている音楽家」だ。ダンサーや美術家から山伏（修験者）まで、さまざまな領域からのコラボレーションのオファーが引きも切らず、活動開始から10年にして、日本の音楽シーンだけでなく、アートシーンに欠かせない人物の一人となった。作曲や演奏活動はもちろん、「作曲」という手法を応用し、映像、サウンド、立体作品を構成した独自のインスタレーションが注目を集める。

「音源制作やライブの、その先にある音楽のあり方を意識しています。展覧会やパフォーマンスのための音楽は、毎回新しい文脈の中にあるので、常に手探りでゼロベースから着手します。やり甲斐と発見の連続で、やればやるほど前に進める。他者の刺激によって自分の立ち位置も鋭くなっていくという実感があります」と蓮沼氏。

9月から始まる個展『作曲的 | compositions: rhythm』は、これまでの音楽活動の集約であり、新たなチャレンジでもあるという。展覧会のテーマは「リズム」。すでにアプローチしてきた「メロディ」と「ハーモニー」から発展し、「リズム」から生み出される創造性にフォーカスする。ここでは「リズム」を聴覚的なものだけでなく、展示空間に設置される作品と時間や空間との関係性や構造と捉える。

「2015年に国際芸術センター青森で開催した個展は安藤忠雄建築の環境を意識してつくりましたが、そこは非対称で光の入り方も不均等な非・展示空間だったんです。今回の個展会場であるスパイラルガーデンも同じく、いわゆる美術館のホワイトキューブとは異なる非対称の空間。そのフリーな動線の空間構成の中に作品、音楽家、ダンサーを、アートの展覧会の手法で〈インストール〉していきます」。

たとえば新作の映像インスタレーション『HANDS』は、展示空間にインストール（設置）された楽器が観客によって演奏される様子を撮影し、それをその場で映像制作アプリ

で編集することによって音楽のようにコンポジション(構成/作曲)する作品だ。また、広々とした吹き抜けのアトリウムでは、複数のメディアがひとつのオーケストレーションを奏でる新作を発表する。これは、インストールされた数点の小作品が、共通したノテーション(記譜法)の楽譜を用いながら、全体がひとつの音楽として立ち上がるというものだ。観客は展示空間を歩きながら、ときに音楽が立体作品や映像に変換される現場に参加し、ときに聴いた音楽を自身が即興で歌うことで、人間の身体を通して変換された音楽を体験する。

「ぼく自身の作曲のメソッドは個性的なんです。とんちで常識をひっくり返すように、飽和状態の音楽の受け皿を自分でつくってしまうことで、音楽の概念を拡張しようとしています。大学では環境学を専攻し、フィールドレコーディングを実践していました。音響作品でも、音を出すのではなく、すでにある音を時間軸をそのままいじらずに使いますが、その整え方にマジックがあります。人間の耳と録音機器では音の受け入れ方が違うので、聴かせたい音の周波数を探し、心地よいレンジとサイクルを発見するんです。過去の研究でも〈人間はどんな音を認知するのか〉というスタディーはありましたが、さらにコンセプトを深めることを考えています。もう2016年ですから」。

20世紀以降、現代音楽やサウンドアートの多くはコンセプトチュアルアートの文脈で語られてきた。もはや受け手に頭を使って考えさせる類いの手法はひと通り出尽くした感があるが、蓮沼の視点はむしろ観客を文脈から解き放ち、音楽をめぐる時間や空間を開放しようとする。21世紀に入った今、その独自のアプローチは新しいアートの地平を切り拓こうとしている。

作曲的 | compositions : rhythm

(Dance New Air 2016 提携プログラム)

9月27日～10月5日

スパイラルガーデン

東京都港区南青山 5-6-23

11:00～20:00

入場無料

関連イベント:

• Dance × Music curated by Dance New Air

10月1日 14:30 / 17:30

出演者: 入手杏奈、杉山恵里香、鈴木美奈子、森川弘和

• EVENTS and Artists Talk

10月2日

14:30 蓮沼執太パフォーマンス

17:30 蓮沼執太アーティストトーク

www.shutahasunuma.com/compositions/